

ルソーの思想における「人間の善性」についての考察

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
丸谷 亜基子

人間とは善なる存在か、それとも悪なる存在か。この問いに対するルソーの答えは「人間とは善なる存在である」というものである。ルソーの著作は広い分野にわたり、後世に多大な影響を及ぼした。そのルソーが広範な彼の思想の中で繰り返したえたこと、それは「人間の本性善」であった。人間は善いものである。われわれは善いものとして生まれる。これらはルソーにおいて、揺らぐことのない確信であり、信念であり、真理であった。なぜルソーはこの確信、信念を持つに至り、真理にたどりついたのか。そして、善性をどのようにとらえ、いかにして証明したのか。このような問題について本論文では考察を進めた。

第一章では、ルソーに「人間の善性」がひらめいた瞬間、そして「善性」を発見するにいたった経緯について考察した。そこにはルソーのそれまでの生い立ちや当時の生活状況が大きく関わっていることを論じた。さらに、ルソーが考える「善性」とはどのようなものであるかを明らかにした。「善性」とはつまり、「自然状態」に存在するものであり、「自然人」こそが「善なる人間」なのであった。

第二章においては、ルソーの教育論『エミール』について取り上げた。『エミール』の執筆はルソーにとって「自らの考える善い人間を実際に創造してみせる」という意味をもった重要な取り組みであった、と私は考えている。『エミール』で行われた教育とは、どのようなものだったのか、教育の目標とするところは何だったのか。これらを中心に論をすすめた。『エミール』において教育され創造された人間は、善い人間であると同時に、腐敗した社会を改め、来たるべき新しい社会を造り上げ、構成する人間でなくてはならなかった。

第三章では、ルソーの生き様に焦点を当てた。ルソーは自分自身の内に存在する善性を強く信じ、そこからすべての人間に共通して内在する善性を導き出した。そのことは、ルソーの生涯に大きな影響を及ぼした。なぜならルソーは自らの生きる姿によって「人間の善性」を証明してみせる必要性に迫られたからである。

ルソーは、思想の軸となる「人間の善性」に自分自身のすべてをかけた。「真理のためにすべてを捧げる」という彼の決心は挫けることのないものであった。ルソーの生きた時代は、今から遠く 300 年ほど前であるが、ルソーの思想、そしてルソーの生き様から現代のわれわれが学ぶことは決して少なくはないのである。